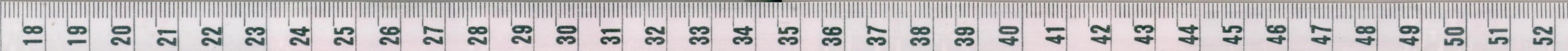
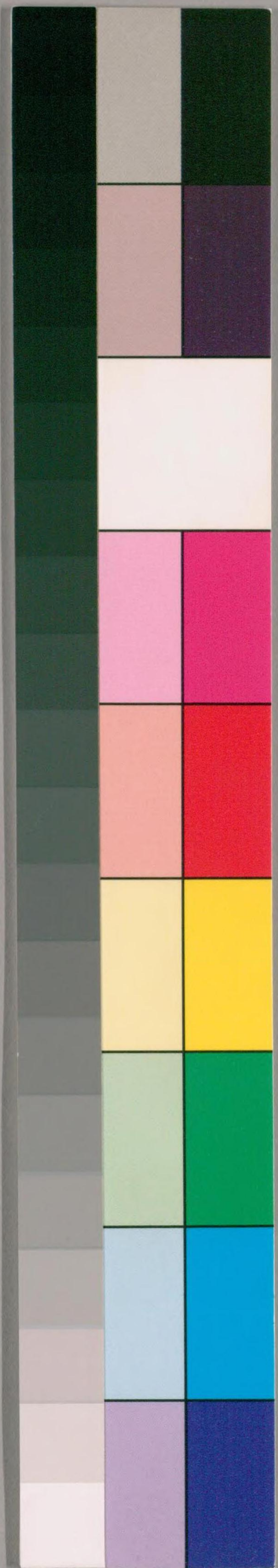




858  
72

葛の松原

全



国立国会図書館 タイトル『葛の松原』 請求記号 858-72

ガラス使用

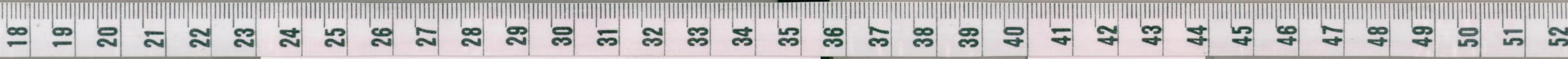


858-72  
葛の松原

野盤子支考述  
潜渊菴不王撰



冬の雪のきかしくまをち秋家人もわら  
かめ水無月のさぬをまじし  
河のいと淵よか鳥はたぐ影を  
とくみ釣はくくも奥のき息をまのひ  
とけきけのけしきやちよといぬ

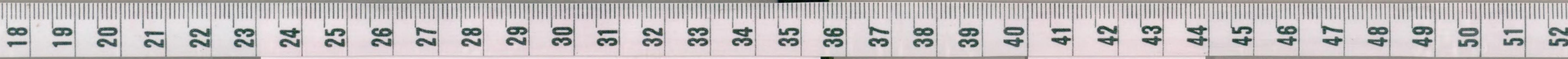




朽もいさめみの原ら〜世の風雅より志と  
とす〜人も万分の一もわづらふ〜  
是故よ支考り随園を志して東の人乃  
記念よをほ〜く作り

○芭蕉の叟ソウ一日嗒葉トウハう終ふ回、風雅の世  
よ初り道こそかた〜とほ〜のれは倍  
あ〜と〜一回と皂狗とわ〜一回と白  
衣とわ〜と〜と〜と〜と〜と

〜〜中間の〜  
を武江の山よ岡迄〜と静〜と  
〜〜凡や〜と花の落〜  
〜〜孫生も名妙〜と〜や  
も〜蛙の水よあ〜音志〜と  
言介乃風情この節よ〜して蛙  
水の音と〜と五と〜と音子  
の傍〜と〜と〜と〜と〜と









おのゝゑとて〜先倭よとて二十一字とて〜  
て上下の情よ〜しむめの情のいさ〜  
〜わり草末も然のくみは〜として高下と  
形容と辞〜もあつた風雅に能く  
〜とてふは俳諧といふまゝの史よとて不  
根の持論といふとこれと諧言の吾とて次  
この法そのくみとあつためじまと阿叟よ  
〜われ古今集の己よ俳諧のくみとてあり

いよの者らとては〜まよ〜は是故に韓  
子と魯論のくみとて〜と華嚴の六瑠  
璃もやれ真よとて〜と俳諧の世の  
変相よ〜して凡雅と志のり〜とあつた  
吾も〜か〜はあ〜とて

〇〜の俳諧は如來禪の〜とてその理の  
貫〜とて線の〜とて〜とて風雅の祖師禪の  
〜とて終着とて〜とて即轉とて〜とて









よらうらむさうこふもあやむかやむかやむか集よ品うし  
ふとふも恋の論と微細のこもあやむかやむか心  
をとく先くむ殊勝の心かこいとうもあやむか  
——晋子の語路ゆかじの酒盃よ渡もあやむか  
ゆふ人ありに宋泊宅編よの自氏う二千八百  
言飲酒の詩九百首あつとと答へたりとこい  
ど晋子の性人よまうれ初を樂天の飲酒を  
か氏かこりあやむかこもあやむか用の度かこいむか

ゆりぬ

○風雅の序——氏ゆのふもあやむか  
家入ふまふをんく始終の妻作をうり  
次世句はだ——かこりあやむかの句の味なり  
ゆふもあやむかこいむかあやむかあやむか  
一句のこと不<sup>レ</sup>論——あやむかあやむか  
あやむかあやむか——中品の眼をとく先くむあやむか  
あやむか轉換変化角の——ゆりぬの情實の





中よりのそり舞

このは一般の才人ねを後ふ詞をこの  
針灸秘訣の談をわろくしとひ出さ  
よろぬもれとろくはさふれいふ  
ちろくもれとろくめたとく田舎人の卒  
都婆を橋よ後とろくもよ人の罪障  
懺悔なれとろくの理あわろくも人  
うろくもろくやいねもふ唐李之藩ハ夜深

枕髑髏とく白をく後ま削りて

ふくかながふまもてとろくあや  
たろく人ねはまろくも消隣  
もろくやろくをれとろく寝ろく  
きおのまろく眼をもろくや固ぬろく  
ろくもろくもろくもろくもろく  
ねろく心ほろくもろく故ろく春草秋鳥ろく





まよも旅し人よほく訓蒙圖彙  
まてんきりしきしむらりあはれん  
し小かきさきしはまらふあき  
く園作りと何人し作きし終しとじ  
ひつきのひれあしむら月あく屋う  
やこれ暑く南とふ向と人のおき  
くむい源氏のまきくよ心とく先  
力の中し終よ董スミレとほきまらわと

わが人ゆかりぬと難く有房郷  
のんじひやよきしむらりあはれん  
し家母と不幸として人しむらり  
しそむけしむられをぬくの終も何  
ぬまきよ酒のま馬しよの終も何  
しあきし

ひとせの秋葛の葉と茶とのじんをかり  
まてんきりしきしむらりあはれん



くんと文一と問ひ結ぶ花の葉あり  
酒をすの飲るをこれと著くこれいさくハレ  
りとも皮骨ハゆめをこ阿婆もあつて  
これしや支考の東の比風種ハ  
りゆんとこよ人の統ハ先これ身之と  
し結ぶとこよ人の統ハ先これ身之と  
かの奥には僻しとまこと寂寞をやられ  
ゆめや平吞よ奪ひて口あり

鎌倉とよく出くじ初鯉

五月あるよのくれぬ物多し

梅若葉鞠よれ者のとらけ

詩よる所を月家変もやとわし  
くし初鯉ハ支考の東の比風種ハ  
支のまよしんをりさゆを生く出  
さよよ鎌倉のよまよ又そのおあつて  
みよるしとわしとあつて





阿波もあつて... 徴幸  
よつとめ... 生死...  
いをぬくか入... 六波羅の...  
... 風程...  
もよふて... 武臣の...  
... 眼...  
... 月...  
... 月...  
... 月...



五湖... 倭... 二... 遇...  
... 古今の...  
... 結前生後の...  
... 葉...  
... 心...  
... 角...  
... 果...  
... 一應...  
... 一應...





らるる也

角又よやのての野のた鳥 其角

阿叟い〜〜〜〜〜の詞を可い晋  
子〜〜〜〜〜の風情を可い古今俳  
諧の〜〜〜〜〜とよた人も〜〜〜〜〜

致極よ受のほ〜〜〜の也 同

定家のこれ受の〜〜〜の〜〜〜

〜〜〜の晋子も自讃〜〜〜の可い  
〜〜〜の質よもわ〜〜〜天縦の凡骨念相  
の可い志を〜〜〜のたなれ趣を〜〜〜  
世人の口意よ〜〜〜の意意意の叟  
かた〜〜〜の人も作〜〜〜の  
〜〜〜の可い

糸の糸あや檐よ〜〜〜の 孫碩

〜〜〜の流〜〜〜の也 支考

上





多しもねくうたふともがふ無心所着の観  
相かしくらうりもさあわりの千載の在りと  
しつこくはあし舞

○趣向の古きも夏の附とくわうりく  
句はくわくもあつてくわくもくわくもくわくも  
正道とふもあつてくわくもくわくもくわくも  
くわくもくわくもくわくもくわくもくわくも  
このむかれもくわくもくわくもくわくも

じとまた人のかあし舞

○毎句あつてくわくもくわくもくわくも  
の能なりくわくもくわくもくわくもくわくも  
うかりもくわくもくわくもくわくもくわくも  
あふふもくわくもくわくもくわくもくわくも  
ふさゆかれの句はくわくもくわくもくわくも  
変化もくわくもくわくもくわくもくわくも  
しつこくはあし舞





あつたつとささやかめつとこれのこが菜  
れ花のつとく石臺とをけむじとれ  
をく竹くつとこれのつとむじ

○月花よわつとに春秋の季と結つむよわつ  
まよとつとよエまとはあつとつとつと趣向つら  
るつと平生の心つと當季の後よつとつと  
つとつとつとつと曲水歳且の才三よつと葛  
菴よ花の端つとつと振つとつとつと葛菴

しつ趣向の起つとつと花の最後の一使あつと  
鳥獣よ木つと用とつとつとつとつとつとつと  
あつとつと

三味線や芳聖のつと青月 曲水

世向と人のつとつとつとつとつとつとつと  
れれつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと





むそみ月ぬの動ふけりかた

○春句ハカクハクふとねらもよしのたをえんま

身一ハエまかりん

幸侍のねらねらりあひら

地句錦をさそしよふり人のこゝろ好悪のめ

人そまのねらふてえたなよく起定轉合ハ四

格とまのねら人も身三のまありハケふねら

又字のこゝろのまをさそしよの一生と

返毫の烟の中よかちるふりねむふに雅

ハ罪人<sup>ツミンド</sup>かゝむ世句花のまやうまふふ

次

◎洛の和及法師ハ宰人ヤこりつる又字ハ

一生とあやまきれと幾と湖南の豊

とまゝの前の秋なむむかき一と

終ぞもよかのねら入はのよハ

とるや世の風雅もあはれとねらと



流水飛禽の情もさうさう次湖南の叟と  
とじまひ柳の冥思もさうさうを極し  
る柳より西より人のさうさう立心玉の小柳  
とさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
先

鳳来寺

夜更しひとり祈り出で花の  
草ゆき霜ふらやうの花

かた有るぬの人をせしむもさうさう  
やいさうさう

ほくまの峰也五人の葛草

雪や餅は薫る心撮りて

かの僧の和及まかた度さうさう次柳よりわ  
そ今を悲しむ人の教をさう

○杜国を心うたれわのさうさう阿叟も忌

目ゆりてさうさう





○今いわざりし世かろきし詩号よん  
たのきく又まよふ凡種よ人の詞をぬ  
とむ前後のぬふは是非なり

○集おしつゝの文字と用へしはくはも  
まよとやしけしおぬちらとむしる者も  
いふくさしわかふし又集よ古人  
てまのいさる又まの形容あまこゆるやうに  
まろしる在るの帯おし尾よほもるを此を

て

○詞とけしひやしむとどか人の精進  
ゆまいとむし客人ともあはれしゆまの凡  
流かまよしもあしひと果る合類節用は  
んが心地をぬん

○林下何曾見一人とむし詩ハ何曾の三字か代  
方へしと評せらる志心よ老社秋興詩  
よ野航拾受両三人とむし何曾のちらとむ





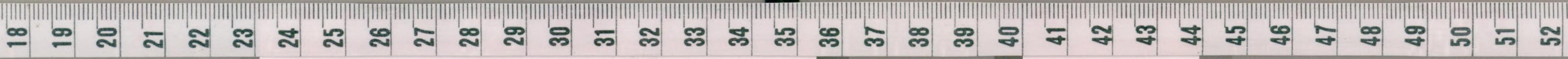
かゆ恰受の不可思議なり詩もふねと  
凡雅から張籍の賈嶋よ多き詩を二三の  
馬蹄今去  
入誰家とよふまきとてまきゆ  
されの文もさゆゆぬものや

○のまはるし詞なりはゞ織の帯う  
はるし九脇とんく古さ小判のつら  
とふぬいお僧の鉢を所らしてん

もりゆらとてのまよとて用かま  
身よのあまこゆさし外のま系艶なれ  
このもんくか

○この比くのれいむじやうに世よれぬ  
つよ言系はれし麦門の中心と  
されい人とかなも餅も飯はき  
われの又か

○晋子の宿れようけきもふとれ魚





ふたつ下の又ふまよとしてうくさつえたるを  
阿婆もはのよふられけり

出らうとらふ詞を養父入られたらとて  
わらわらと

わらわらや幼らうよわられ 嵐雪

嵐雪う初の一字とて人はむらりの後  
きゆやたらく馬よの熟盛と給うとわら  
よ甲のつと入らうとてしよ頬の紅なり

終よまへ髪のはらふはらとてわらわら

二八の美少のうらふはらむらむら  
あいらふと

○せよ切字の發句とてむまむら

酒の先をうらむらむら

○二句の姿もあつむらむら趣向のむらむらと口を

むらむらむらむらむらむらむらむらむら

むらむらむらむらむらむらむらむら

















姥もつあそひもよや相の花 う 荊口

梅もよ秋のあそひあつて音 こゝろ 落梧

葎よあそひあつて秋のあそひ こゝろ 探志

草刈の子と握りあそぶ 羽 不玉

カリヤス 葎草とあそびあつて 露 露川

あそびと馬車や鐘の目しり 胎 胎頂

出女やあそびあつて 同 同

あそびの花やあそびあつて 乙 乙列

阿叟小園日あそびあつて

あそびあつてあつて

八月の月 羽 呂丸

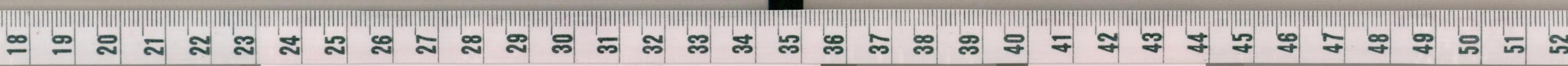
高灯籠あつてあつて 汗 汗那

夕まや川あつてあつて 正 正秀

園あつてあつてあつて 同 同

秋の月あつてあつて 文 文料

本曾塚あつてあつて





木曾殿と背ありと心なき民 又玄

お花や改ちりしと花くしと 楚江

文菊や葉と形しひ麻のうへ 智片

振るくさ葉のめらも花のね 闇如

燦々もや産るの銘とめらと 夕可

娘追善

草花のふとふもく輝のま 均水

馬の耳すほめくきり梨の花 支考

風陽のふき風雅よんごしり

進み解燃る

油新しくくわぬよ能たふ心菊 月

まの葉や合の吹くりろろ電 昌房

稲妻や颯りし焼くめり白ひ 卧高

紫船よこつれくこよ心堂らん 寺角

鯉草や木のほりくさる團賣 同

初秋や篠葉吹あつとくは髪 木枝



いひて結くもまろ水の徒  
如好

唐報の系をたるとむ月之  
成秀

葉の花や小雀もつる海  
史籍

片くもく大もはくく小深く  
竹戸

縄なつふくも秋のお白く  
野童

ふゆや水よひこまもま  
原伴

一海り待人をまらぬ  
尚白

青なるも園のよき返り  
里東

五文字乃大魚の又あり  
もねりえん

作者も好の一字として  
螢火一点の無明

とのこされもいふ  
あ

青草や姐板よど  
交花荷 卧高

かへ風情とある人も  
あまもつねに

夢のよりこのるよ  
らそひて口ねく

夢ひなるひとも唐か  
しとまら執









○走 歌よを事おむしつ松の音

有ぬのやうららるるるるるるるる

○響ヒキキ 夜ぬの雅子と山つ林原り

五む十し何あつるるるるるるるる

稻の葉つひの力かなふ凡

○聲ニホヒ 露心の初は越る鈴の原やま

無所任心りさるるるるるるるるるる

後無心の道人あつる珠よしつるるるる

う終わつるるるるるるるるるる

○二句の志とて強ふとさるるるるるる

れはゆらうゆらふ夏や月らつた林原と馬の口

とらつるるるるるるるるるるるるるる

らつるるるるるるるるるるるるるる

りなつるるるるるるるるるるるるるる

○さつらつるるるるるるるるるるるるる

麦のつるるるるるるるるるるるるる

アモカイル

智月





三十五  
慈とくつふよひ寝や富士の言 智月

大津の禪尼やのふし列り東武の行と送れ  
ふらふや人のまよのよしく心もぬるえとを  
けりくえと姑と少をばらぬれじの恩愛して  
次と子とよきしじり義方ぬると世の人ぬ  
終つふをばらぬつと母と恩愛のたぬるれ  
をじつしよもねぬし世の人化家なり  
けりくえと姑と少をばらぬれじの恩愛して  
次と子とよきしじり義方ぬると世の人ぬ  
終つふをばらぬつと母と恩愛のたぬるれ  
をじつしよもねぬし世の人化家なり

きつとくつふよひ寝や富士の言 智月  
大津の禪尼やのふし列り東武の行と送れ  
ふらふや人のまよのよしく心もぬるえとを  
けりくえと姑と少をばらぬれじの恩愛して  
次と子とよきしじり義方ぬると世の人ぬ  
終つふをばらぬつと母と恩愛のたぬるれ  
をじつしよもねぬし世の人化家なり  
けりくえと姑と少をばらぬれじの恩愛して  
次と子とよきしじり義方ぬると世の人ぬ  
終つふをばらぬつと母と恩愛のたぬるれ  
をじつしよもねぬし世の人化家なり



さるは文和の國にまれば林葉は桃の比世句  
すなはち都の方より吾妻洛より関  
のぬりいれ白くうりよもかきふすし  
を阿波みり名らまをさやうりすたれ  
金源より撰集よりまじりぬくしよいわ  
を

白桃や粟もとらぬ水の色 桃藤

緋桃を火のこけぬく白桃をかりけ  
よらうかきしひく新水の旁とた  
まきくは句のふみりしと阿波みり  
ちりし

名月や池をたぐりて夜もす  
必しとふまかきしよまふ豊亭の  
しと固しきふまき色蕉庵の月んが



一

○凡雅と一句のきこばる所風流なり一  
へ意の害とくとも詞の雅をゆるし  
むらう孫も月ノ駒と後るるま  
そのぬらひかきも今の人こゆるを  
に飽ましく姿入りくもめりとも  
しりすともよらひ

からま後をん味方の糸の女昂花 史邦

○馬上ホコは樂を横て吟と何人と今の世  
らま後をん味方の糸の女昂花  
とくは世昂の凡家なすや阿豊と  
かきゆのゆられた名十八ははぐ  
と深く武具モクの櫃クよれとえもりや  
なるとめらむ草のゆらとよも  
向といふ

本枯の地やうく落とめぬ

去来













素言タハコトと関も言ひの何れぬ人の  
 名よもそくしつゝのくぬをほしむとせりふ  
 きはのりんもさやけしと人の交り  
 見かゆ移を移し美食の病ゆんなりぬ  
 の居常ヨコトヨの消息も妓童舞女の隠語をよしえ  
 これをたのもしく後とほきしふとあそぶ  
 一とふ女もやゆふ所あふそりもれ  
 ○凡雅と道の階材をれと内ハ肝膽の理りり

めいん外ハ人物の情よ達スなれともの凡  
 雅を墻ししてせの利要よとよむしとる  
 ものも箇中の論よあつしと多口は是  
 非ぬと阿叟ハはのよとせりも若モシあそぶ  
 一とを吾いともしとて阿鼻入口業  
 へとつとつとて於テ圖司ガ之調柏堂ニ而絶筆ヲ

元禄五申五月十五日

東行餞別





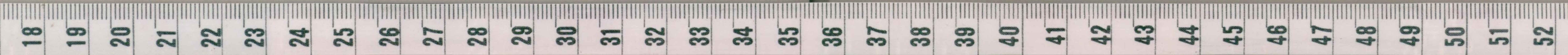
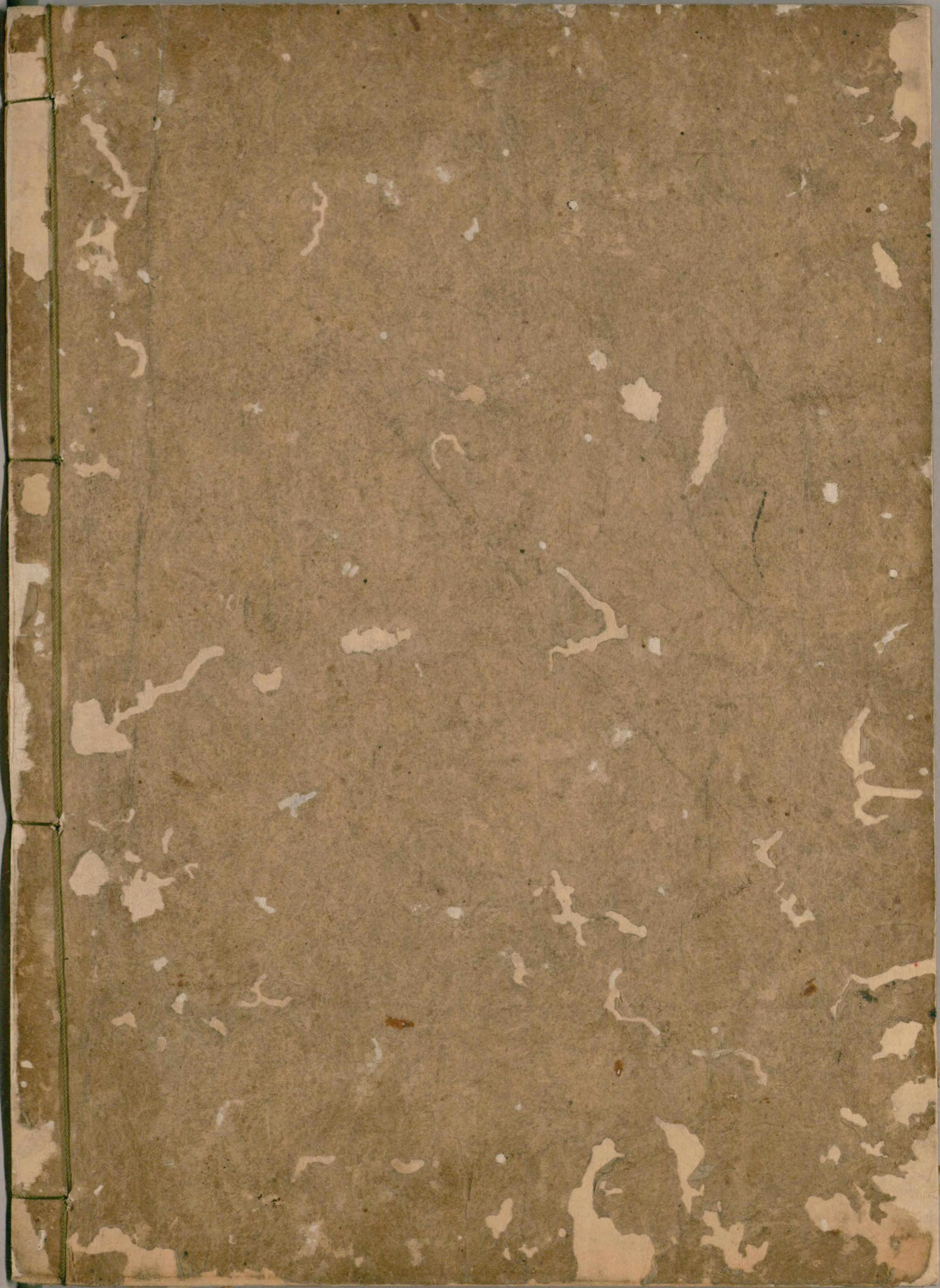


858  
72

京寺町通二条上  
丹筒や左巻板







国立国会図書館 タイトル『葛の松原』 請求記号 858-72

ガラス使用